学生と教員で作る文理融合リベラルアーツＦＤ公開フォーラム

文理融合リベラルアーツ科目を受講して ―受講学生の意見―

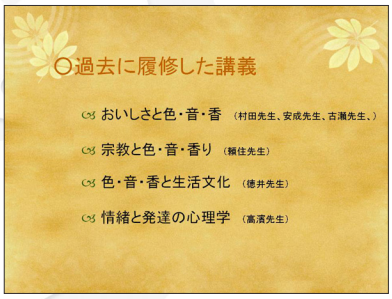
「色・音・香」系列受講生

梅田 麻美（文教育学部 人文科学科 比較歴史学コース２年生）

文教育学部の人文科学科比較歴史学２年の梅田麻美です。私が系列で履修した際の「色・音・香」についてお話しさせていただきます。よろしくお願いいたします。

では、まず私が「色・音・香」を系列で履修しようとした理由を説明いたします。先ほどご紹介にあずかりましたとおり、私は歴史を専攻していまして、特にその時代、その国の文化について興味を持っています。

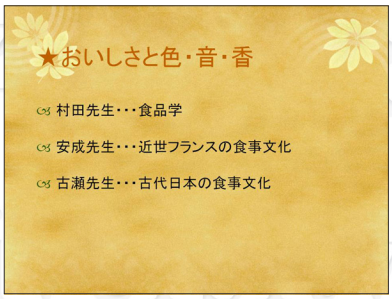
そこで、リベラルアーツの履修案内を最初に拝見しましたところ、「色・音・香」の欄に「『色・音・香』という身近な感覚、感性を切り口として、自然の原理や人間の文化、社会について、また人間と自然、社会との相互作用についての理解を学ぶ」と書かれていたので、「色・音・香」という系列が自分の興味に一番近いかと思い、履修することにしました。



次に、私が過去に履修したリベラルアーツの科目をご紹介したいと思います。私は教職も取っているのですが、その時間割の関係上まだ四つしか取れていません。最後の「情緒と発達の心理学」というのは、まさに今日、水曜日の１限にあるので、まだ履修も、取れると思うのですが、単位にはなっていないので、過去に履修したというのはまだ早いと思うのですが。あと「おいしさと色・音・香」「宗教と色・音・香」「色・音・香と生活文化」「情緒と発達の心理学」を履修しています。

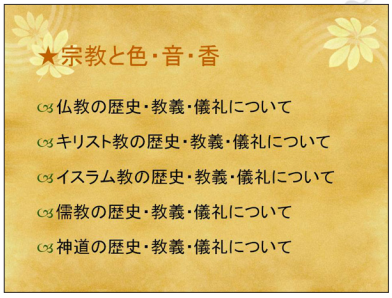
次に、各講義の内容についてご説明していきたいと思います。

まず「おいしさと色・音・香」ですが、これは３人の先生方がオムニバス形式で講義していただく講義です。まず村田先生に、自然科学的見地からの食物、つまり食品学についてご説明、講義していただきました。例えば基本五大味、苦味とか甘味とか、そういうものの説明ですとか、味の素さんが講義にいらして、味の素さんの講義を聞かせていただいたりしました。



次の安成先生からは、近世フランスの食事文化についてご説明していただきました。これは例えば、当時、近世フランスでは味とかよりも見た目の豪華さの方でおいしさを、今の私たちにはよく理解できないのですが、食べての味ではなくて、見た目の豪華さでおいしい、お金を幾らかけているかでおいしさを判断するというような内容でした。

最後の古瀬先生は古代日本の食事文化、例えば芋がゆが今の私たちからするとスイーツとして考えられていたというような意外な事実を教えていただいたりしました。この授業はほかの授業と違って、一つの講義で文理融合がなされていたので、とても興味深いと思いました。



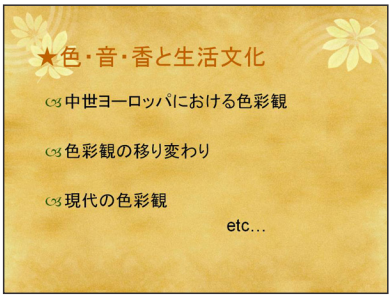
次に、先ほども上村さんがご説明していたのですが、「宗教と色・音・香」について説明します。これは仏教、キリスト教、イスラム教、儒教、神道のそれぞれの歴史、教義、儀礼についてお話ししてくださいました。先ほどもおっしゃっていたとおり、先生の専門が仏教なので、大半が仏教の説明で、キリスト、イスラム、儒教、神道は少しでした。「色・音・香」というテーマは、無理やりといってもいいほど少なかったと思いました。

Copyright©2010 Ochanomizu University. All Rights Reserved.

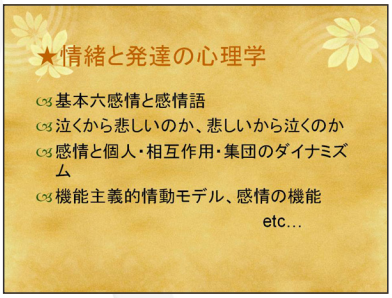
次に「色・音・香と生活文化」について説明いたします。これは中世ヨーロッパにおける色彩観、例えば黄色が忌み嫌われていたとか、赤は高貴な色だとか、赤にもいろいろな色があるという話をしていただきました。

また、色彩観の移り変わり。これは黒が昔はあまりいい印象ではない。清貧とか、そういう印象だったのですが、シャネルとかの影響でだんだんかっこいい、今はみんなよく着ていますし、私も今着ていますが、黒がかっこいい、クールな色だというふうに色彩観が変わってきたこと。そして、また今黒がはやっているように、現代の色彩感などもお話ししてくださいました。

また、この授業中で、例えばローマの紫はどのように色を取っていたのかなど、生物といってもいいぐらいの内容、結構濃い内容のお話もされていたので、そこは少し文理融合がなされているかと思いました。



次に今履修している「情緒と発達の心理学」を説明いたします。これは基本６感情と感情語ですとか、泣くから悲しいのか、悲しいから泣くのか、感情と個人・相互作用・集団のダイナミズム、また機能主義的情動モデルや感情の機能など、さまざまな心理学についてのお話がされています。まだ今履修している最中ですので、これからどうなるかは分からないのですが、今のところ「色・音・香」は、やはりそのテーマにのっとっておらず、心理学の基礎、基本を説明してくださっていると思います。

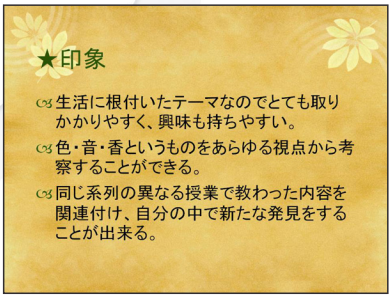


次に、「色・音・香」系列を履修してみての印象や問題点について説明していきたいと思います。

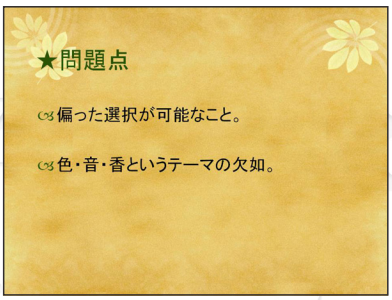
まず、印象です。いい印象なのですが、履修案内にもあったとおり、身近な感情である色・音・香を取り扱っていますので、やはり生活に根付いたテーマで、とても取り掛かりやすく、興味も持ちやすい講義がほとんどでした。

また、色・音・香というものをあらゆる視点から考察することができる。

次に同じ系列の異なる授業で教わった内容を関連付けて、自分の中で新たな発見をすることができる。例えば「宗教と色・音・香」で、少しでしたが、キリスト教の「色・音・香」、考え方、何色がいいとか、そういうことを聞いた後で、「色・音・香と生活文化」を履修しましたので、キリスト教の色彩観と西洋の色彩観を関連付けて、こういうこともあるのだなという新たな発見をすることができるというのがよかったと思いました。



逆に問題点です。まず偏った選択が可能なことが問題かなと思いました。これは系列内の五つの講義を受講すると、確か最初に、就職のときに使えるという話も聞いたのです。そうすると、やはり学生は少しなまけ心を出して、五つでいいかなと思ってしまいがちだと思うのです。それは個人によりけりなのですが、私は最初に五つだけでいいかなと思ってしまった部類です。そうすると、今、私が過去に履修した講義、「おいしさと色・音・香」「宗教と色・音・香」「色・音・香と生活文化」「情緒と発展の心理学」と、あともう一つ何か取れば大丈夫なわけです。そうすると、文理融合という観点からはほど遠い内容を履修してしまっている。そうすると、やはり「文理融合リベラルアーツ」などに偏った選択が可能になってしまいます。そこが問題かなと思います。



あと、やはり時間割の都合上、私は教職を取っていますし、ほかにもいろいろ忙しい方もいらっしゃって、時間割がかぶってしまう。自分の取りたい授業もあるのに、リベラルアーツを系列で取ろうとするとかぶってしまって、犠牲にしなければいけない。そういうことも結構周りでよく起きているので、そう考えると、別に系列で取らなくてもいいのではないか、系列にしなくてもいいのではないかと思ってしまいます。

また、先ほどから少し述べているとおり、「色・音・香」というテーマの欠如というのが、一番この系列では問題点かと思います。先ほど上村さんもおっしゃっていた気がするのですが、正直な先生もいらっしゃいまして、講義中に「どうやってこのテーマをつけるかな」と、つぶやいた先生もいらっしゃって、先生も結構大変だなと思ったりもしましたが、わざわざ系列にし

Copyright©2010 Ochanomizu University. All Rights Reserved.

なくてもいいのではないかと。「色・音・香」というテーマがあれば、入り込みやすいし、取り掛かりやすいし、関連・リンクさせやすいのでいいとは思うのですが、無理やりやらなくてもいいのではないかと思いました。

私なりに出した結論です。「色・音・香」という科学的にも文化的にも考察可能なテーマであるため、やはり興味を持ちやすく、系列で履修することで、確かに身近な物事を多面的に見ることができるようにもなります。また、自分の専攻以外の知識、例えば「おいしさと色・音・香」では、私は食品学についてあまり知識がなかったのですが、食品学の基礎について教えていただけましたので、専攻以外の知識も得られるために、幅広い教養、一般教養と変わらないとも思えるのですが、幅広い教養を身に付けられると思いました。

しかし、私のように選択を誤ると、文理融合という最大のテーマが行われないこともあって、その場合、系列で履修することにあまり意味がなくなると思います。私は生物が好きなので、全学共通の基礎生物学 A、B などを取ったりしているのですが、系列を取ってみて、文理融合はそんなに行われないと思ったので、理系の授業を文系でも取りやすい、逆もまたしかりならば、リベラルアーツには利点としてあるかと思うのです。しかし、そこまでしなくても、そんなに文理融合がなされないのであれば、系列にしなくてもいいのではないかと思いました。

★結論★

色・音・香という科学的にも文化的にも考察可能なテーマであるため、興味を持ちやすく、系列で履修することで身近な物事を多面的にみることができるようにもなる。又、自分の専攻以外の知識も得られるため、幅広い教養を身につけられる。しかし選択を誤ると、文理融合という最大のテーマがおこなわれないこともあり、その場合系列で履修する事にあまり意味はなくなる。

以上で私の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

Copyright©2010 Ochanomizu University. All Rights Reserved.